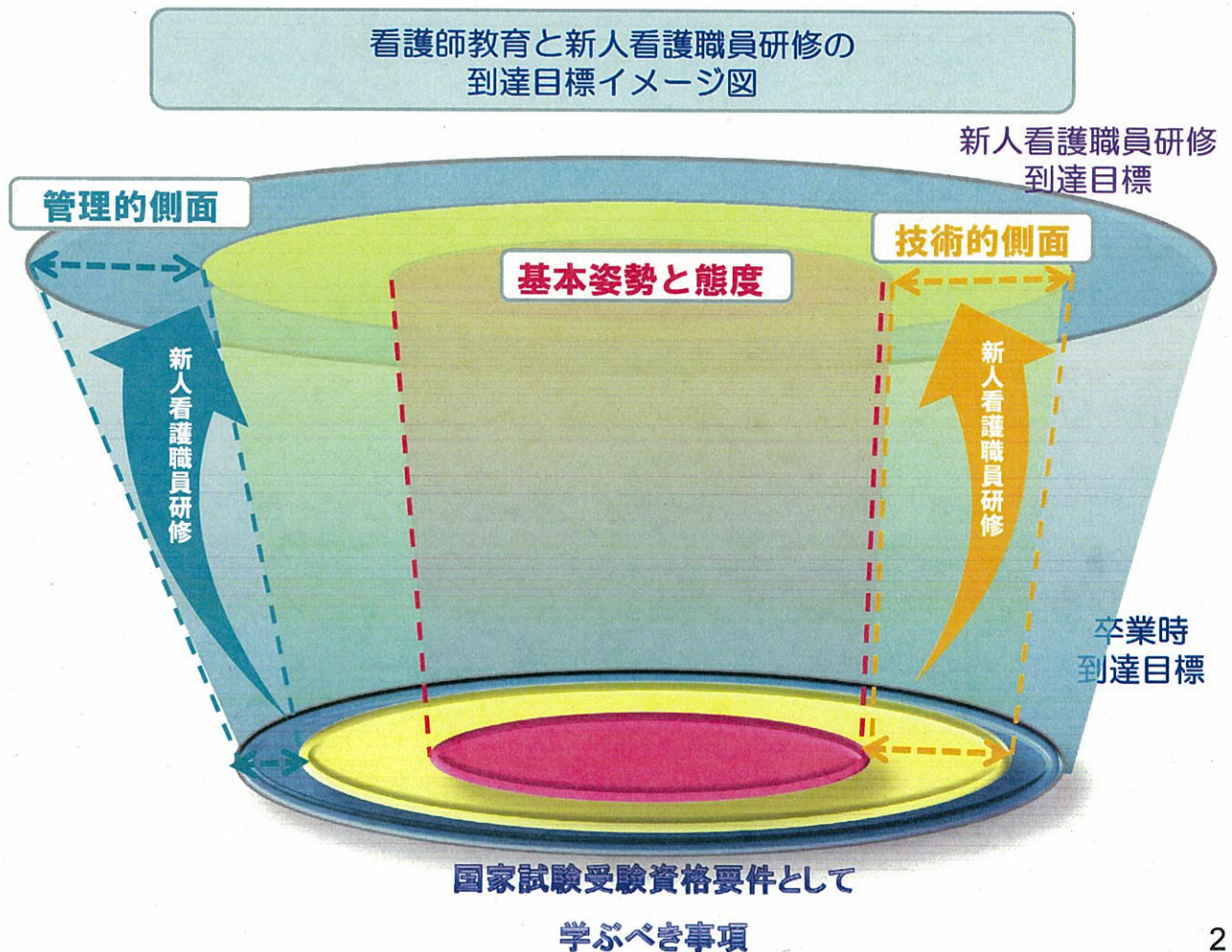


到達目標に関する資料

1



2

看護師基礎教育と新人看護職員研修における到達目標（看護技術）の関連性について（イメージ）

＜ 到達度 IV：知識としてわかる III：演習で実施できる II：教員・指導看護師の指導のもとで実施できる I：単独で実施できる ＞

卒業時		新人研修終了時（注：新人研修終了時の到達度は仮に設定したもの）	
1 環境調整技術	1 患者にとって快適な病室環境をつくり出すことができる		I
	2 基本的なベッドメイキングができる		I
	3 臥床患者のリネン交換ができる	II	I
2 食事の援助技術	1 患者の状態に合わせて食事介助ができる（嚥下障害のある患者を除く）		I
	2 患者の食事摂取状況（食行動、摂取方法、摂取量）をアセスメントできる		I
	3 患者の栄養状態をアセスメントできる		I
	4 経管栄養法を受けている患者の観察ができる	II	I
	7 患者に対して、経鼻チューブからの流動食の注入ができる	II	I
	8 モデル人形での経鼻チューブの挿入・確認ができる	II	I
	6 患者の個別性を反映した食生活の改善を計画できる	III	I
	5 患者の疾患に応じた食事内容を指導できる	IV	II
	10 患者の食生活上の改善点が見つかる	IV	II
	3 排泄援助技術	1 自然な排便を促すための援助ができる	
2 自然な排尿を促すための援助ができる		I	
3 患者に合わせた便器・尿器を選択し、排泄援助ができる		I	
5 ポータルトイレでの患者の排泄援助ができる		I	
6 患者のおむつ交換ができる	II	I	
7 失禁をしている患者のケアができる	II	I	
11 失禁をしている患者の皮膚粘膜の保護ができる	II	I	
4 膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察ができる		I	
8 膀胱留置カテーテルを挿入している患者のカテーテル固定、カテーテル管理、感染予防の管理ができる	III	I	
9 モデル人形に導尿または膀胱留置カテーテルの挿入ができる	III	I	
10 モデル人形にグリセリン浣腸ができる	IV	I	
12 基本的な排便の方法、実施上の留意点が見つかる	IV	I	
13 ストーマを造設した患者の一般的な生活上の留意点が見つかる	IV	I	
4 活動・休息援助技術	2 患者の歩行・移動介助ができる		I
	1 患者を車椅子で移送できる		I
	7 患者の機能に合わせてベッドから車椅子への移乗ができる		I
	11 患者をベッドからストレッチャーへ移乗できる		I
	12 患者のストレッチャー移送ができる		I
	9 目的に応じた安静保持の援助ができる	II	I
	6 臥床患者の体位変換ができる	II	I
	10 体位制限による苦痛を緩和できる	II	I
	13 関節可動域訓練ができる	II	I
	3 廃用症候群のリスクをアセスメントできる	II	I
	8 廃用症候群予防のための自動・他動運動ができる	II	I
	14 廃用症候群予防のための呼吸機能を高める援助が見つかる	II	I
	4 入眠・睡眠を促進した日中の活動の援助ができる		I
5 患者の睡眠状態をアセスメントし、基本的な入眠を促す援助を計画できる	IV	II	
5 清潔・衣生活援助技術	6 患者が身だしなみを整えるための援助ができる		I
	9 陰部の清潔保持の援助ができる		I
	2 患者の状態に合わせて足浴・手浴ができる		I
	1 入浴が生体に及ぼす影響を理解し、入浴前・中・後の観察ができる		I
	8 入浴の援助ができる		I
	10 臥床患者の清拭ができる		I
	3 清拭援助を通して、患者の観察ができる		I
	11 臥床患者の洗髪ができる	II	I
	4 洗髪援助を通して、患者の観察ができる	II	I
	13 患者の病態・機能に合わせて口腔ケアを計画できる	II	I
	12 意識障害のない患者の口腔ケアができる	II	I
	5 口腔ケアを通して、患者の観察ができる	II	I
	7 持続静脈内点滴注射を実施していない臥床患者の寝衣交換ができる	II	I
	14 持続静脈内点滴注射実施中の患者の寝衣交換ができる	II	I
	15 沐浴が実施できる	II	I
6 呼吸・循環を整える技術	12 酸素の危険性を認識し、安全管理の必要性が見つかる		I
	10 酸素ボンベの操作ができる		I
	1 酸素吸入療法を受けている患者の観察ができる		I
	5 酸素吸入療法が実施できる		I
	6 気道加湿ができる	II	I
	9 モデル人形あるいは学生間で体位ドレーンを実施できる	II	I
	11 気管内吸引時の観察点が見つかる	III	I
	7 モデル人形で、口腔内・鼻腔内吸引が実施できる	III	I
	8 モデル人形で、気管内吸引ができる	III	I
	13 人工呼吸器装着中の患者の観察点が見つかる	III	I
	15 循環機能のアセスメントの視点がわかる	IV	II
	3 患者の自覚症状に配慮しながら体温調節の援助ができる	IV	II
	2 患者の状態に合わせて温熱法・冷熱法が実施できる	IV	II
	4 末梢循環を促進するための部分浴・薬法・マッサージができる	IV	II
14 低圧胸腔内持続吸引中の患者の観察点が見つかる	IV	II	
7 創傷管理技術	1 患者の褥瘡発生の危険性をアセスメントできる		I
	2 褥瘡予防のためのケアが計画できる	II	II
	3 褥瘡予防のためのケアが実施できる	II	II
	4 患者の創傷の観察ができる	II	II
	6 創傷処置のための無菌操作ができる（ドレーン類の挿入部の処置も含む）	III	II
	7 創傷処置に用いられる代表的な消毒薬の特徴が見つかる	III	II
	5 学生間で基本的な包帯法が実施できる	IV	II
8 与薬の技術	11 経口薬の種類と服用方法がわかる		I
	1 経口薬（パルシット、内服薬、舌下錠）の服薬後の観察ができる		I
	12 経皮・外用薬の与薬方法がわかる		I
	2 経皮・外用薬の与薬前後の観察ができる		I
	3 創傷内与薬の与薬前後の観察ができる	III	I
	5 モデル人形に創傷内与薬が実施できる	III	I
	14 皮下注射後の観察点が見つかる	III	I
	15 皮下注射後の観察点が見つかる	III	I
	16 筋肉内注射後の観察点が見つかる	III	I
	7 モデル人形または学生間で皮下注射が実施できる	III	I
	8 モデル人形または学生間で筋肉内注射が実施できる	IV	I
	18 薬理作用をふまえた静脈内注射の危険性が見つかる	IV	I
	17 静脈内注射の実施方法がわかる	IV	I
	19 静脈内注射実施中の異常な状態が見つかる	IV	I
	6 点滴静脈内注射の輸液の管理ができる	IV	I
	4 点滴静脈内注射を行っている患者の観察点が見つかる	IV	I
	9 モデル人形に点滴静脈内注射が実施できる	IV	I
	10 輸液ポンプの基本的な操作ができる	IV	I
	20 抗生物質を投与されている患者の観察点が見つかる	IV	I
	13 中心静脈内栄養をうけている患者の観察点が見つかる	IV	I
	21 インシュリン製剤の種類に応じた投与方法がわかる	IV	I
	22 インシュリン製剤を投与されている患者の観察点が見つかる	IV	I
	23 麻薬を投与されている患者の観察点が見つかる	IV	I
	24 薬剤等の管理（毒薬・劇薬・麻薬・血液製剤を含む）方法がわかる	IV	I
25 輸血が生体に及ぼす影響をふまえて、輸血前・中・後の観察点が見つかる	IV	I	
9 救命救急処置技術	1 緊急なことが生じた場合にはチームメンバーへの応援要請ができる		I
	7 意識レベルの把握方法がわかる	II	I
	2 患者の意識状態を観察できる	III	I
	3 モデル人形で気道確保が正しくできる	III	I
	4 モデル人形で人工呼吸が正しく実施できる	III	I
	5 モデル人形で閉鎖式心マッサージが正しく実施できる	III	I
	6 除細動の原理がわかりモデル人形にAEDを用いて正しく実施できる	IV	I
	8 止血法の原理がわかる	IV	II
10 症状・生体機能管理技術	3 患者の一般状態の変化に気づくことができる		I
	1 バイタルサインが正確に測定できる		I
	5 バイタルサイン・身体測定データ・症状などから患者の状態をアセスメントできる		I
	4 体系的な症状の観察ができる	II	I
	2 正確な身体計測ができる	II	I
	8 正確な検査が行えるための患者の準備ができる	II	I
	9 検査の介助ができる	II	I
	10 検査後の安静保持の援助ができる	II	I
	11 検査前、中、後の観察ができる	II	I
	6 目的に合わせた採尿の方法を理解し、尿検体の正しい取り扱いができる	II	I
	7 尿糖測定ができる	II	I
	14 身体機能を伴う検査の目的・方法、検査が生体に及ぼす影響が見つかる	III	I
	13 血液検査の目的を理解し、目的に合わせた血液検体の取り扱いが見つかる	IV	II
	12 モデル人形または学生間で静脈血採取が実施できる	IV	II
11 感染予防技術	1 スタンダード・プリコーション（標準予防策）に基づき手洗いが実施できる		I
	2 必要な防護用具（手袋、ゴーグル、ガウン等）の装着ができる	II	I
	3 使用した器具の感染防止の取り扱いができる	II	I
	4 感染性廃棄物の取り扱いができる	II	I
	5 無菌操作が確実に行える	II	I
	6 針刺し事故防止の対策が実施できる	II	I
12 安全管理技術	1 インシデント・アクシデントが発生した場合には、速やかに報告できる		I
	2 災害が発生した場合には、指示に従って行動がとれる		I
	3 患者を認識しないための防止策を実施できる		I
	4 患者の機能や行動特性に合わせて搬送環境を安全に整えることができる	II	I
	5 患者の機能や行動特性に合わせて転倒・転落・外傷予防ができる	II	I
	6 放射線曝露の防止のための行動がとれる	II	I
	7 誤薬防止の手順にそって与薬ができる	III	I
	8 人体へのリスクの大きい薬剤の経路の危険性および予防策が見つかる	IV	I
13 安楽確保の技術	1 患者の状態に合わせて安楽に体位を保持することができる		I
	2 患者の安楽を促進するためのケアができる		I
	3 リラクゼーション		I
	4 精神的安楽を保つための看護ケア		I

新人看護職員研修到達目標及び新人看護職員研修指導指針の前提

「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書より

1. 到達目標及び指導指針は、新卒者の就業の状況、安全な看護ケア提供に当たっての優先度を考慮し、病院において看護ケアを提供する看護職員を想定した。
2. 到達目標に含まれる内容は、看護職員として必要な姿勢及び態度並びに卒後1年間に新人看護職員が修得すべき知識、技術の目標とした。
また、新人助産師については、看護職員として修得すべき到達目標に加え、法で業務独占とされる助産を含む助産技術に関わるものも示した。
3. 指導指針に含まれる内容は、到達目標を達成するために必要な要件、指導方法等とした。
4. 到達目標及び指導指針の内容は、新人看護職員研修として実施されるべき基本事項として提示するものであり、各施設の多様性を踏まえつつできる限り広く活用できるよう考慮した。
しかしながら、施設規模、看護職員の構成、教育に係る予算等の状況から、各施設内での調整を行うことも必要である。
さらに、到達目標は、新人看護職員の受けた教育課程や教育内容、個人の資質等の背景を加味し、各施設で適宜、調整を行うことを想定した。
5. 各部署に特有な疾患とその症状及び治療・薬剤・検査・処置の理解と看護ケアに関する到達目標は、各施設において設定することを想定した。
6. 到達目標の作成に当たっては「看護学教育の在り方に関する検討会報告」、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」等の看護基礎教育における看護技術教育のあり方に関する検討結果との連携を考慮した。

4

新人看護職員研修到達目標設定のプロセス(案)

到達目標を設定する上で考慮すること

- ・病院の施設規模
- ・病院の機能
- ・病院の理念
- ・看護部の理念
- ・看護職員の構成
- ・新人看護師を支える体制
- ・新人研修にかけられる時間・予算
- ・目指す看護師像(どんな新人に育ててほしいのか)

到達目標の検討手順

- ・項目
- ・詳細さ
- ・難易度
- ・到達時期

5

到達目標における項目の設定例

自施設の特徴を踏まえて、各施設が設定する

A病院

B病院(平成16年版到達目標と同じ項目で設定)

C病院

活動休息援助技術	活動休息援助技術	活動休息援助技術
①歩行介助・移動の介助・移送 ②体位変換 ③入眠・睡眠への援助	①歩行介助・移動の介助・移送 ②体位変換 ③関節可動域訓練・廃用性症候群予防 ④入眠・睡眠への援助 ⑤体動、移動に注意が必要な患者への援助	①歩行介助 ②車椅子による移送 ③ストレッチャーの移送 ④体位変換 ⑤関節可動域訓練・廃用性症候群予防 ⑥入眠・睡眠への援助 ⑦体動、移動に注意が必要な患者への援助 ⑧プレイルームでの遊びの援助

6

詳細さの設定例:「車椅子による移送」

パターンⅠ

パターンⅡ

パターンⅢ

車椅子による移送	車椅子による移送	車椅子による移送
	1. 車椅子の準備ができる 2. ボディメカニクスの原理・原則を述べるができる 3. 患者の状況や状態に応じた移乗ができる 4. 羞恥心に配慮した対応ができる 5. 危険の回避が出来、安全に対する留意事項がわかる	1. 車椅子の構造や使用方法を述べることができる 2. 患者の状況に応じた必要物品が準備出来る(酸素ボンベ・点滴スタンド・廃液バックカバーなど) 3. ボディメカニクスの原理・原則を述べるができる 4. 患者に車椅子移乗と行き先を説明できる 5. 患者の身支度を整えることができる 6. 羞恥心に配慮した対応ができる 7. 車椅子や必要物品の準備ができる(車椅子を20~30度の角度で置き、フットレストを上げ、ブレーキをかける) 8. 患者の状態やルート類などに注意して移乗できる 9. 移乗後、患者の状態を観察し、点滴ルート、酸素などの確認行動ができる 10. 患者へ声かけを行いながら、移送介助ができる 11. 段差や傾斜時の対応ができる 12. 移送介助後の患者の観察ができる

7

難易度の設定例：「車椅子による移送」

タイプⅠ

タイプⅡ

タイプⅢ

状態が安定している患者	状態に変化のある患者 重症度が中等度の患者	重症・急変の恐れのある患者
<ul style="list-style-type: none"> ■ 18歳 女性 貧血 安静度：院内フリー 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 筋力低下でふらつきあり ■ 左片麻痺がある患者 ■ 下肢に強度の浮腫があり、皮膚が脆弱 ■ 起立性低血圧で転倒歴あり 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 脳神経外科の手術後で循環動態の変化が大きい患者 ■ 大腿部頸部骨折で体重が100キロ ■ 複数の点滴ラインあり、シリンジポンプ使用、酸素投与中

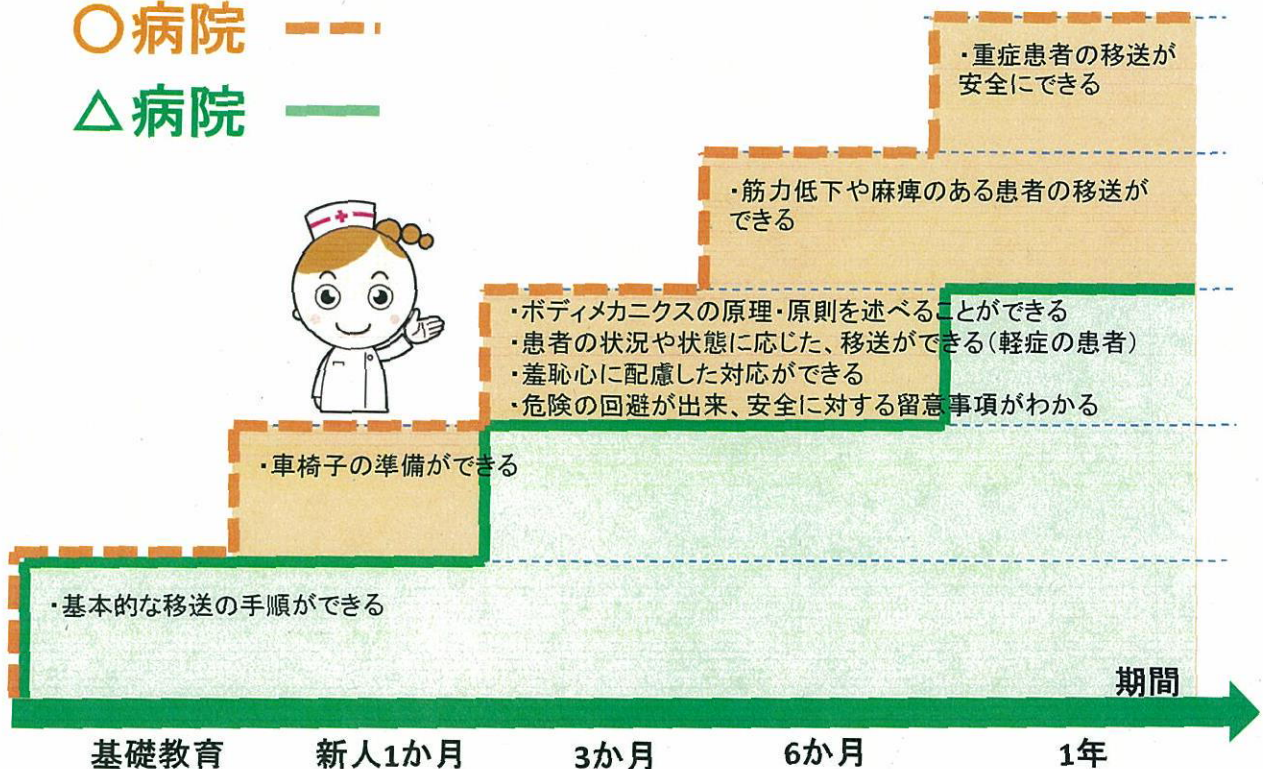
難易度

8

到達時期の設定例：「車椅子による移送」

○病院

△病院



9

到達目標の項目の提示例：「車椅子による移送」

項目	1か月	3か月	6か月	1年
車椅子の準備ができる	→			
ボディメカニクスの原理・原則を述べるができる	→	→		
難易度 患者の状況や状態に応じた、移送ができる(軽症の患者)	→	→		
羞恥心に配慮した対応ができる	→	→		
危険の回避が出来、安全に対する留意事項がわかる	→	→		
難易度 筋力低下や麻痺のある患者の移送ができる	→	→	→	
難易度 重症患者の移送が安全にできる	→	→	→	→

10

ガイドラインで到達目標をどう示すか

案1

到達目標を各施設で検討するための考え方の道筋を記載し、項目、詳細さ、難易度、到達時期の設定例と到達目標の例を示す。

案2

到達目標を各施設で検討するための考え方の道筋を記載した上で、いずれの施設でも共通する項目について標準的な到達目標を示す。



決めるべきこと

- ・共通とする項目
- ・標準とする難易度
- ・標準とする到達時期

案3

到達目標を各施設で検討するための考え方の道筋を記載した上で、すべての項目について到達目標を示す。



決めるべきこと

- ・すべての項目における詳細項目
- ・すべての詳細項目ごとの到達時期

11